

## 「2023年中国・浙江大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学文学部3年 青波 亮太郎

## ①学習成果

「留学」ということに関わる学習成果は以下である。まず、中国の大学がどのようなものかを知ることができた。一方では自分が実際に歩き回って体得した施設の構造や手続きの形態、もう一方では浙江大学の学生の方々と話すことで知った浙江大学のあり方の2つの側面から知ることができた。実際に浙江大学の中に入ることで体得した「中国の大学」像は、外からでは知り得ないものである。また、留学生向けの授業がどのような形で行われており、中国語で中国語を教える授業がどのようなものかを知ることができた。世界中から集まった留学生のクラスに入って授業を受けたのも普段にはない刺激的な体験だった。クラスメイトや観光中に会う現地の人々、中国人ボランティアの方々に中国語で積極的に話しかけると、通じないことも多かったとはいえ、ある程度中国語が通じたことは自信にもなった。相手が優しく聞き取ろうとしてくれることが多かったのも嬉しかった。以上のような経験を経て、今回のプログラムに参加する前に比べ、より長期の留学をしてみたいと考えるようになった。また、日本にいる間も、今回のプログラム中のような積極的な姿勢をもって、日本に留学に来ている人たちとの交流を図りたいと考えるようになった。さらに、今回身につけた中国語力の基礎をさらに伸ばして、中国の人たちの話を聞いたり、中国語でコミュニケーションをとったりしたいというモチベーションが高まった。

次に、筆者は東洋史を専攻しており、それに関わる学習成果は以下である。南方の新石器文化である良渚文化の博物館の見学により、玉器を中心とする良渚文化の遺物からその文化のあり方にイメージを持つことができた。紹興の会稽山を訪問し、夏・禹王の伝説が残る禹王陵を確認した。蘇州の虎丘塔を訪れ、呉王闔閭・夫差以来の悠久の歴史、さらに各時代それぞれに史跡として受け継いできたことを知った。王羲之「蘭亭序」で有名な蘭亭を訪れ、書道の聖地として崇められる当地の雰囲気を感じとった。杭州・西湖の白堤・蘇堤を歩き、継続的な灌漑の努力が積み重ねられてきたことを実感した。西湖の舟の中や雷峰塔・城隍閣の望楼から、古人が漢詩に詠んできた伝統的な情景を目の当たりにした。岳王廟をはじめ杭州に残る南宋・臨安の遺産を各地で見学し、西湖・銭塘江・鳳凰山に囲まれた臨安の宮都としての特性を実感した。何本もの運河が連なる蘇州の町並みを歩き、「蘇湖熟すれば天下足る」と称された往時の灌漑農業の遺産、そして近世以降に都市化して発展していった様子を肌にした。拙政園や獅子林を見学し、江南の有力者たちの庭園のあり方および奇岩や仏像、さらにステンドグラスなど、江南文化の方向性を見ることができた。紹興の魯迅故居を訪問し、民国期の邸宅の中を歩くことができた。その他多数の史跡・博物館を訪問し、実物を含む多くの歴史遺物を実見した。総じて、中国歴史文化の重要な一翼を担ってきた江南文化への知見を深めることができた。現地を歩き回ること、風景・地理感覚をも合わせて理解を深められたと思う。

プログラム全体の学習成果として総括すると、中国語のレベルアップ、文化体験・観光による中国に対する知見の向上、特に博物館・史跡の訪問による江南史への知見の深化、そして世界各国からの留学生や中国の現地の人々を含む多様な人々との交流と刺激が主要なものである。その他の学びも数多あることは言を俟たない。

## ②海外での経験

杭州がどのような街か知ることができた。杭州にはアリババとタオバオの本社があり、中国の中でもデジタル化が進んでいる街であった。あらゆる支払いは Wechat pay か Alipay で行われ、至るところに QR コードがあった。ビル街の迫力や地下鉄のハイテクっぷりも驚くべきものだった。一方で南宋の臨安以来の古い伝統を有する街でもあり、名所旧跡が西湖周辺を中心に多数存在する。古さと新しさを見事にハイブリッドした街であった。西湖が象徴的であり、一方には「南朝四百八十寺」のような鐘の音鳴り響く寺院と霞がかかった山々の景色があり、

反対を向けば都心の如きビル街が続いており、70 円で乗った舟の上から一望することができた。プログラム期間中、授業以外の時間は自由に行動することができたので、杭州の観光地を堪能することができた。

土日は完全にフリーであったので、高速鉄道やタクシーを利用して近隣の諸都市に繰り出すことができた。蘇州と紹興に行った。見学した施設については①で既に報告した。本プログラムの魅力の一つは、かなり自由度が高く、自分の興味に応じてアレンジすることができる面にあるように思う。

### ③プログラム内容

プログラム内容は、中国語の授業と杭州観光のアクティビティ、および浙江大学の学生との共同セミナー発表である。

中国語の授業は、1日約2コマ、10日間行われた。長期留学生のクラスに2週間だけ混ぜてもらった形式だった。レベル別になっており、自分は4級のクラスに配属された。口語・閲読・精読・写作の4種類の授業があり、それぞれに力を延ばすことができた。特に興味深かったのは精読の授業であり、単語の使い方や類義語間の違いについて、詳細な解説をしてもらった実践的な授業だった。各授業ごとに特色はあるが、先生の質問に答えるあるいは学生間で話し合うなど、口語の授業でなくても中国語を話す練習が多く用意されていた。授業は中国語で行われたため、授業内容を聞き取るのが本当に大変だったが、なんとか聞き取ろうと全身全霊を傾けたおかげでリスニング能力が上達したように思う。最終日にはテストがあった。教材のPDF配布や授業連絡はDingdingというアプリを介して行われた。

アクティビティでは、浙江大学側のボランティアの方々と一緒に、杭州のいくつかの観光地を回った。初回は、浙江大学最大のキャンパスである紫金港キャンパスに赴き、艺术与考古博物館を見学した。また、浙江大学国際教育学院にて、歓迎セレモニーがあった。2回目は、河坊街および銭塘江ライトアップを見に行った。3回目は、良渚博物院および良渚文化村に行った。4回目は、丝绸博物館と茶叶博物館を見学した。各アクティビティは自由度が高く、再集合時間までは好きなように回ることができた。最終日には卒業セレモニーがあり、修了証書を授与された。

共同セミナー発表について、報告者は4人1班で、浙江大学の学生の方5人ほどに対してプレゼン発表をし、それを踏まえてディスカッションをし、班別にディスカッションの内容をまとめて全体に大して再度発表する形式だった。

なお、渡航前に10時間程度の中国語事前学習および4時間程度の共同セミナー発表準備があった。中国語事前学習はチューターの方がとても親切かつ丁寧に教えてくれたため、短い時間ながら中国語の力を上げることができた。特に聞き取り能力の向上の面でありがたかった。

### ④進路への影響について

プログラム前より、専攻している東洋史学の学びを深めるべく大学院への進学を希望していたので、進路への大幅な影響はない。上述したように、留学やそれに類するプログラムにより積極的に参加したいと考えるようになったことは、報告者にとって重要なモチベーションの変化である。